

復活節第4主日 5月8日 分かち合い

ヨハネ 10-27

5月になり、復活節も第四週に入る。この時期、福音で毎年読まれるのが、良い牧者についての話。今日の箇所は、ヨハネ 10 章の後半部分だが、前半には、馴染み深いよい羊飼いの話がある。よい羊飼いは、羊の名を呼んで導き出し、羊の世話をし、必要なときには、羊のために命を捧げると言う言葉がある。

羊飼い(牧者)の話は、イスラエルの人々に馴染み深いもので、エゼキエルの預言の中にも、イスラエルの民を指導する人々のたとえとして語られる。牧者が本来の務めを果たさず、自分たちのことを優先させ、羊のことを心にかけない。イスラエルの王をはじめ指導者たちが自らの使命を果たさず、民の苦しみを放置している、そこで、指導者にかわって、神ご自身が牧者となって民を治めるという話し。

初代教会が迫害下にあっても、大事にしたイエスのイメージは、牧者のイメージだったと言われる。ローマのカタコンベの中や、初期の絵図の中に、よい牧者の姿がよく描かれている。今日の「聖書と典礼」の表紙にある「良い羊飼い」のモザイクも、キリスト教が公認されて間もない時期に、ラヴェンナで描かれたもの。人となられた神の子、イエスは、まさに、よい牧者として、人々の世話をし、人々に生きる糧を与え、人々のために自らを渡されたことを教会は確信していた。「わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない」とヨハネは記す。

しかし、今日の第二朗読に選ばれている黙示録には、「小羊が牧者となり、命の水の泉へ導く」という言葉があった。よい牧者の話になると、とかく、羊飼い、牧者に関心が向きがちだが、黙示録の導きにより、小羊について少し考えてみたい。復活節の間、何度も、「過越しの小羊」という言葉を聞いた。ミサの祈願の中にも、復活賛歌や復活の続唱にも「過ぎ越しの小羊」という言葉があった。「過越しの小羊」と言えば、昔、イスラエルの人々がエジプトの圧政から解放されたとき、小羊を屠って、その血を各家の柱と鴨居に塗るようにとモーセは民に命じた。エジプト人の家では、初子が死ぬという災難が降りかかったが、小羊の血を塗ったイエスラエルの家の子はわざわざを免れた。それをイスラエルの人々は、毎年、過越祭のとき、小羊を屠って記念していたのだ。

イエスが十字架上で亡くなられ後、弟子たちは復活の主に出会い、主が生きておられることを確信したが、教会は、では、あの十字架の死は何だったのかと考えた。そして、聖書(旧約)の言葉に照らされて、復活されたイエスは、イスラエルの人々が屠ってきた小羊にかわる新しい過越しの小羊、人々を罪の軛から贖い、解き放つ新しい過ぎ越しとして理解するようになった。洗礼者ヨハネが、イエスを弟子たちに紹介するとき、「見よ、神の小羊」と言ったのは、そのことを見抜いておられたのだろうか。ミサの中で、平和の賛歌を歌う時、「世の罪を除きたもう神の小羊」と言い、また、聖体拝領の前に「神の小羊の食卓に招かれた者は幸い」と司祭がいう時、はたしてこうしたことを意識しているだろうか。

先ほど読まれた黙示録の中には、「屠られた小羊」という言葉が何度も出て来る。たとえば、ヘンデルのメサイアで歌われる、「屠られた小羊は、力、富、知恵、威力、誉れ、栄光、そして賛美

を受けるにふさわしい方」(5.12)、とある。十字架上で亡くなられたイエス、いわば、屠られた小羊のように、無力で、物言わぬ存在となられた方が、今や生きて、神の右の座に着き、世界中の人々から賞賛を受けておられる。厳しい迫害の中にあって、イエスへの信仰ゆえに苦しみを受ける者に、黙示録の著者は、小羊の受けた栄光を讃えるものとなる光景を示し、「玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へ導く、」と記し、「よい牧者」が文字通り、人々のために渡される小羊であることを、思い出させてくれる。

こうした小羊である牧者に養われ、導かれていることを感謝し、わたしたちも、日々の生活を主に捧げ、人々のために惜しみない奉仕を実践しながら、主を賛美する人々の群れに加えられるよう祈りたい。(S.T.)